

薬師寺金堂本尊光背の復原

美術工芸研究室

「薬師寺縁起」および「七大寺巡礼私記」には、薬師寺金堂内の莊嚴についてかなり詳しい記述がある。こゝでは、それらの文献に記載される金堂本尊の光背意匠について若干の検討を加え、あわせて当初の光背の復原を試みた。

文献に記される光背の検討 順序としてまず文献の記事を抄録する。

〔薬師寺縁起〕（醍醐寺本諸寺縁起集）（前略）円光中半出七仏薬師像、火炎間刻造立数飛天也（後略）

〔七大寺巡礼私記〕（前略）身光刻付半出七仏薬師像、又縁光影飛天十九軀、其須弥炎刻宝塔一基、彼塔上立三柱之九輪、尤以奇、子細可尋、

この縁起および私記の記述で、半出七仏薬師像の位置が、前者では「円光」とあり、また後者では「身光」とあって若干相違しているが、かりに円光を身光ないし炎光の誤りとすれば、両文献でいう光背はほゞ同一のものを示していると考えられ、およそ次のようなことが指摘できよう。①金堂本尊の光背は半出（浮彫）の七仏薬師像を配置した火炎づき拳身光背であったこと。②その火炎の間には19体の飛天が刻まれていたこと。③光背先端部（須弥炎）

には3柱の九輪を立てた宝塔がついていたこと。

つまり、これを具体的な作例にあたれば、四十八体仏中の、飛天と3柱九輪の宝塔とを配した甲寅年銘光背（第2図）があげられ、これに最も近似したものと推測できよう。

しかし、こゝで注意すべきは、①の七仏薬師像についてであり、これが果して従来いわれているように、義淨訳の『薬師瑠璃光七仏本願功德経』2巻（七仏薬師経）で説かれる「七仏薬師像」を意味しているものか否かである。かつて、足立康はこれを同経において初出の七仏薬師像と解釈して、金堂三尊の造立年代は、その漢訳の唐神竜3年（707）を遡りえないと論じた。しかし、もしこの光背が甲寅年銘光背のような意匠ならば、法隆寺金堂釈迦三尊以来の古式な拳身光背の意匠を踏襲しているとも解釈できる。その場合、文献でいう七仏薬師像は縁起および私記の撰述者の既成概念、第2図 甲寅年銘金銅光背（東京国立博物館蔵）もしくは先入観による記述とも考えられ、あるいはこれを単なる7体の化仏とみることも可能であろう。そして、もしそうならば、所依經典を必ずしも義淨訳の七仏薬師経に求めなくともよいのではないか。

所依經典との関係 いったい薬師如来の形像について詳しく述べた經典はなく、この場合ほかの仏像ほど所依經典との関係が密接ではない。ことに義淨訳の七仏薬師をどのように表現するかを説いた經軌はないから、この限りでは光背の化仏によって逆に所依經典を求めるることは困難といえよう。

たしかに、いわゆる七仏薬師について、それぞれの世界・位置・教主・大願などの詳細を訳出しているのは、義淨訳の七仏薬師経が初めてである。しかし、たとえば玄昉訳の『薬師瑠璃光如来本願功德経』1巻（薬師経）には、「（前略）晝夜六時禮拜供養彼世尊薬師瑠璃光如来、讀誦此經四十九遍、燃四十九燈、造彼如來形像七軀、一一像前各置七燈、（後略）」とあって、すでに如來形像7軀（この場合はすべて薬師瑠璃光如来）を造って供養礼拝すべきことを説いているが、これが義淨訳となると、第1光勝世界の善名称吉祥王如来以下のいわゆる7世界7如來（七仏薬師）に相応するところとなるのだから、必ずしも義淨訳に依らずとも、光背に七仏如來の化仏が表現される可能性がある。つまり、義淨訳以前の薬師經はちょうど義淨訳の七仏薬師経下巻分（第7瑠璃光如來部分）のみの部分訳に相当し、義淨訳において初めて他の六仏分が訳出（上巻）されるのだから、七仏薬師の原型はすでに義淨

訳以前にも7軀の如来形像として提示されているものと考えられよう。したがって、たとえば覚禪鈔の七仏薬師法に、「尊同体、本願経一仏、七仏経各別尊一体分身也、仍一卷二卷経題同置薬師瑠璃本願経、即第七瑠璃光仏名号也、又両経見始終更無差異也、本願経形像七軀者、二卷経所説七仏也、(後略)」とあるのも、要するに七仏如来と七仏薬師とが同体であることを説明しているのである。したがって、金堂本尊の光背の七仏の場合、必ずしも義淨訳の七仏薬師経が所依經典とはならないといえよう。

天平時代の薬師經典 第1表によって概観すれば、天平時代において義淨訳の七仏薬師経の事例(写経)が数例認められるが、優婆塞貢進解をはじめ、勅による国家的な薬師供養においても、多く玄奘訳の薬師経が用いられているのは注意されてよからう。ただし、表中の「新翻薬師經」は本願薬師経と並記されるところから、当然これが義淨訳の七仏薬師経と解され、また単に「薬師經」とあるのは、多く1巻経であるから、これは玄奘訳とみてよからう。もちろん、表示の史料でたまたま貢進解文が天平年中にかたまっているため、玄奘訳の盛行がめだつともいえよう。しかし、たとえば続日本紀に記載される天平勝宝6年(754)11月8日における聖武・光明両皇の御体平安・宝寿増長祈願の薬師供養や、また降っては宝亀4年(773)12月25日における光仁帝の国祚光隆のための薬師供養でも、いずれも玄奘訳の薬師経の1節を文中に引用しており、いわば当時の国家的レベルでの薬師供養において、なお新訳の七仏薬師経が用いられていない事実は注目されてよからう。

したがって、これらのことから、薬師寺金堂本尊の光背意匠の場合、少なくとも天平時代に比較的流布の少ない義淨訳の七仏薬師経に依ったというよりも、文献記載の光背が甲寅年

薬師寺金堂本尊光背の復原

銘光背に近似していることを重視すれば、むしろ飛鳥時代以来の伝統的古制の拳身光と考えられ、7体の如来形も単なる化仏（あるいは玄奘訳の7軀の薬師）と見るほうがより妥当なのではなかろうか。

光背の復原 第1・3図は文献の記載に近似する甲寅年銘光背を修正・モザイクして、他の莊巣とともに金堂本尊の実測図（本尊は写真測量による）、あるいは金堂復原図に接合・重ね合わせたものである。この際、光背の高さは像の白毫高のは

西暦	年 次	薬師経（一巻経）	件数	七 仏 薬師経 (義淨訳)	件数	備考 (出典)
685	天武13.9		1			天皇不豫、誦経(紀)
686	朱鳥元.5	薬師経	1			天武天皇篤病、誦経(紀)
720	養老 2	薬師経	1			藤原不比等篤病、誦経(統紀)
732	天平 4	薬師経(1巻)	1			秦公豐足、誦経(優婆塞貢進解)
733	天平 5	本願薬師経(3巻)	1	新翻薬師経(4巻)	1	写經目録(正倉院文書7-6)
734	天平 6	薬師経(1巻)	1			葛井連廣往、誦経(貢進解)
736	天平 8	本願薬師経(4巻)	2	新翻薬師経(6巻)	2	元正先皇・阿倍内親王写經(正文)
"	"	隨願薬師経(1巻)	1			満辺淨土、誦経(貢進解)
742	天平 14	薬師経(1巻)	8			柿本臣大足ほか7名、誦・誦経(貢進解)
743	天平 15	本願薬師経(1巻)	1			日置部君稀持、誦経(貢進解)
"	"	薬師経(1巻)	2			秦三田次ほか1名、誦経(貢進解)
744	天平 16	(薬師経)	1			天下諸国の薬師御過7日(統紀)
745	天平 17(薬師経(1巻)	1)難万君、辛国連人成(貢進解)
"	"	隨願陀羅尼	1			
"	"	(薬師経)	1			天皇不豫、薬師御過(統紀)
"	"	(薬師経)	1			阿倍虫麻呂、造像7軀写經7巻(統紀)
746	天平 18	薬師経(49巻)	1			正三位橘夫人宅奉詔坐者(法隆寺東院資財帳)
(年次不明)	(薬師経(1巻)	6			丹波史年足ほか5名、誦・誦経(貢進解)
		本願薬師経(1巻)	1	七仏薬師経(1巻)	1	百濟連第(弟麻呂)(貢進解)
750	天平勝宝 2	薬師経	1			勅により、薬師経に扁依御過(統紀)
"	"			七仏薬師経(下巻)	1	請經并充筆墨等注文(正文11-370)
754	天平勝宝 6	薬師経	1			勅により聖武・光明天皇のために薬師瑠璃光仏に扁依供養(統紀)
773	宝亀 4	薬師経	1			勅により国神光隆のため設立行道(統紀)
780	宝亀 11	本願薬師経(336巻)	1	新翻薬師経(22巻)	1	西大寺資財帳

第1表 薬師経典の事例一覧

△2倍強に仮定した。また、これには堂内の空間、他の莊巣との均衡を考慮し、また法隆寺金堂釈迦三尊像をはじめ、唐招提寺金堂本尊、あるいは当初の天蓋を備えた平等院鳳凰堂本尊などを参考にして推定した。なお、金堂復原図は薬師寺金堂復興事務局の模型製作用設計図をもとに、光背・他の莊巣・内陣空間を考慮して、当研究所建造物研究室との協議によって、天井の高さなど若干修正を加えてある。

いうまでもなく、この推定復原光背から、当初の光背の表現上のこと（様式）は問題にできない。たとえば頭光周囲の忍冬唐草文や飛天の作風などは、三尊の様式に比較して古式にすぎるきらいがあろう。また、モザイク・修正の制約から、化仏の間隔がつまりすぎ、また舟型の拳身光の輪郭がやゝ細身にすぎるきらいがある。

しかし、いざれにしても復原光背の形式・意匠のうえでは、たとえば堂内空間や三尊構成における均衡、莊巣的な効果、あるいは他の莊巣とのつり合いなど、意外にもかなり古式なものであることが明らかとなろう。その点、たとえば薬壺をもたない本尊の像容や、懸裳を垂らした宣字型台座意匠、さらに日耀宝珠や羅網で飾られた天蓋などとあいまって、三尊構成における形制や莊巣意匠には、どちらかといえば法隆寺金堂釈迦三尊以来の伝統的な古制がかなり踏襲されているものとみてよいのではなかろうか。このことは、従来とかく三尊の表現ないし様式の斬新さが重視されがちであったのに加えて、上代における光背・台座意匠の変遷とともに、今後さらに再検討されてよい問題であろう。

（長谷川 誠）